

## 特集：インタラクトする風景

風景は、自然と人為がインタラクトするなかで初めて成立した。インタラクトの渦中にあるそれは、感動と恥じらい(ペトラルカ)、眺望と隠れ場(アブルトン)など、さまざまな両義性に突き動かされている。この両義性ゆえに、風景は、各種メディアとインタラクトし、人や街を変容させるにもかかわらず、時を超えてその風景じたいをつないでいくという不思議な力をもつ。その力をまざまざと伝えてくれるのが、ここに収録された5編の論考である。

地中海都市カンプリルスで、環境と人の営みがつくりだす空間のかたちが、種々の知覚表象と作用しながら過去と未来を繋ぎ続けていること(竹中)。画家ブッサンが、自然の美的観照の時代の直前、寓意と類似に基づく風景画を描き続けたこと(栗田)。建築家堀口捨己が、宗達の美術を介し、もう一つの近代としての縹緲たる庭を立ち上げようとしたこと(田路)。近現代産業の形成した産業景観が、産業遺産への愛着醸成装置としてのメディアを通じた原風景化のなかで成立すること(岡田)。NYハイライン再開発計画や、9.11の瓦礫を撮影した作品において、風景と写真が互いを媒介しつつ、相互浸透していること(茂登山)……。

インタラクトする、という語を除去するなら、風景はその生命力を失う。テキストと並ぶ特集、『JuncTure』史上初の写真グラビアを構成する四人のアーティストの眼差しもまた、インタラクトの産物であると同時に、読者とインタラクトするのを待ちのぞんでいる。ぜひ玩味されたい。